

令和 5 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00341

研究課題名(和文)抄物を中心とした中世後期の学問のネットワーク

研究課題名(英文)A scholarship network of the late medieval period with a focus on the shomonos

研究代表者

蔦 清行 (TSUTA, Kiyoyuki)

北海道大学・文学研究院・准教授

研究者番号：20452477

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間全体を通じて、抄物を文化的資料として利用するという方法論の、理論的背景とその実際の方法のいずれについても、より精密な解像度で論じることができ、また得られた知見を公表することができた。最大の目的であった抄物をめぐる学問のネットワークについても、『古文真宝』の抄物を具体的事例として、学僧たちの個人的な関係が、抄物という著作における学説の関係にも影響しているのではないかと、という見通しを得ることができた。今回の研究課題では黄庭堅の詩の注釈が研究の中心であったが、今後、蘇軾やその他の詩人の作品についても、同様の方法によって研究を発展させることが期待できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題は、抄物を文化史的資料として解読する研究の一つであり、その方法論を標準化しようとした基礎研究と位置づけられるものである。抄物を編纂した五山禅僧らの知的ネットワークを、抄文の層を解剖的に分析することによって、解明しようとする方法を提案したこと、またいくつかの抄物において具体的にその重層性を明らかにした点に学術的価値がある。中世後期は、能・狂言や茶道、懐石、生け花など、現代伝統文化の基礎が形成された時代である。当時の文化人の学問が、それらを生み出す土壌であった。彼らがどのように知的世界を形成していったかを明らかにしようとした点に、現代社会につながる本研究課題の社会的意義を主張する。

研究成果の概要(英文)：Throughout the entire research period, I discussed with greater resolution both the theoretical background and the practical methods of using the shomonos as material for researching cultural theme, and I published those findings. As for the network of scholarship surrounding the shomonos, which was the main objective of this project, I gained an insight into how the personal relationships among the monks may have influenced the academic relationships in the works of shomonos, especially in the shomonos of "Kobun shinpo" as a specific case study. Although the focus of this research project was on the annotations of Huang Tingjian's poems, we can expect to develop research on the works of Su Shi and other poets in the future using similar methods.

研究分野：国語学

キーワード：抄物 中世日本語 日本文献学 五山禅僧 林宗二

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、中世後期の学問のネットワークを明らかにしようとするものである。

中世後期は、日本文学史の中でも、漢籍への学びが広くそして熱心に行われた時代である。五山禅僧や博士家を中心にして、漢籍の講義が頻繁に開かれ、注釈書が多く著され、そして聯句や和漢聯句の会が至るところで催された。そこで集積された知は、近世の文化圏にも継承され、文藝史・学問史に新たな展開をもたらす基礎となっていった。その意味で中世後期の漢籍の学問状況を研究することは、単にいわゆる五山文学等の個別研究にとどまらず、日本文藝史・学問史の流れを明らかにする重要な位置を与えられるものである。

代表者は研究開始当初の時点までに、黄山谷の詩集の注釈を主たる研究対象として、二つの科研費研究課題「引用人名・書名より見る『黄氏口義』の学史・文化史的意義」(2012年度～2013年度)、および「中世抄物の註釈の展開—『山谷幻雲抄』『黄氏口義』の比較による—」(2016年度～2018年度)において、どのような人々が何を利用してどのような学説を積み重ねてきたか、研究してきた。現在には残っていない多くの抄物があったであろうこと、それらの一部ないし多くは成書の形ではなく、原漢文テキストへの書き入れという形で流通していたであろうこと、等が明らかになった。

二つの研究課題で明らかにできたことは多いが、一方で新たに問題として浮上してきたこともある。その中でも重要なものは、これまでの研究が、主に黄山谷の詩集の注釈の中でも、『黄氏口義』・『山谷幻雲抄』およびそれらに関連する抄物という、ごく狭い範囲に限られていたということである。山谷詩をめぐる学問状況は、もう少し広い背景の中でどのように位置づけられるのか。この方向を検討していく必要があると考えられた。さらに重要な問題として、従来の研究では、抄物がどのように作られてきたかという面は明らかにし得たものの、その抄物がどのように読まれ、伝えられてきたのかという面についてはほとんど問題とされなかった、ということがある。中世後期の文化と学問を知るには、それらの有機的なつながり、たとえば抄物は誰が読んだのか、そこで得られた知識はほかの作品を読むときにどのように用いられたのか、といった点をさらに究明していく必要があるであろう。

以上が研究開始当初における当該分野の背景である。

2. 研究の目的

本研究課題の確信をなす学術的「問い」は、前節のような経緯を踏まえて、中世後期の学問のネットワークがいかなるものであったのか、というところに設定された。

中世後期の学問のネットワーク、といっても、実際にはさまざまな文献を通じたアプローチが可能であるが、本研究では、寛永整版本『古文真宝前集抄』をひとつの事例として、この文献を中心とした学説のネットワークを明らかにすることを目的とする。この資料を選ぶ理由は、原典たる『古文真宝』が複数の著者の詩文を集めたアンソロジーであり、それぞれの著者の作品の個別の注釈との比較が行いやすいことが主なものであるが、徂徠に批判される江戸時代中期以前までは、西鶴・芭蕉らに言及されるなど、広く普及した教養書であったという点も大きい。近世の教養に抄物がどのような影響を及ぼしたかという問題に直結するからである。

ここまで、やや抽象的な記述が続いたので、少し具体例を挙げながら本研究の目的について述べたい。

『古文真宝』前集には黄山谷の詩がいくつか収録されている。では、『古文真宝前集抄』でのそれらの詩の注釈は、どのような学説に由来するのだろうか。

黄山谷の詩の注釈にはいくつかの系統がある。1 萬里集九の手になり、慶長元和ごろには古活字版も作られた『帳中香』の系統。2 三条西実隆の周辺で参照されたことが知られている月舟寿桂抄『月舟頭書』をもとに成立したと考えられる『山谷幻雲抄』の系統。3 一韓智翹が抄し、正保年間に整版本が作られた『山谷抄』の系統などである。

そして寛永整版本『古文真宝前集抄』の山谷詩の註文には、一韓智翹抄『山谷抄』(3)がそのまま用いられている部分があることが判明しているのである(申請者による口頭発表「ゾソソ攷-文献学的抄物読解-」(第32回日本語日本文化教育研究会、2018年6月30日)において概要を報告し、後に「ゾソソ攷-文献学的抄物読解-」(『問谷論集』第14号)として刊行された)。抄者が不明であることは遺憾だが、彼が何者であれ、『古文真宝前集抄』の作成に当たっては、一韓智翹抄の『山谷抄』系の抄を参照し、『山谷幻雲抄』系の抄は参照しなかったのである。これを逆に一韓抄系統『山谷抄』の側から言えば、その読者には少なくとも寛永整版本『古文真宝前集抄』の抄者があった、ということになる。一韓抄『山谷抄』は正保年間に整版本が作られるが、それ以前にも受容されていたのである。

とはいえ、一韓抄系統『山谷抄』が利用されるのは、『古文真宝前集抄』の黄山谷詩の抄文のうち、ごく一部に過ぎない。では『古文真宝前集抄』の抄者は、それ以外にはどのような資料を参照していたのだろうか。

本研究は、このような、上の世代の抄物がどのように読まれたのか、下の世代の抄物は先行抄をどのように利用して作られたのか、という問題を明らかにすることを目的とする。このような問題に対する取り組みは、これまで極めて少なかった、抄物を文化的資料として解読する研究と

位置づけられるものである。さらに言えば、その中でも最も研究の蓄積の薄い、抄物が誰に、どのように読まれたのか、複数の異なる原典に対する講義や注釈がどのように関連していたのか、という問題を開拓する研究と言える。そしてそこに本研究の学術的独自性が存する。抄物を文化的資料として用いると言っても、一つの抄物だけ見ていたのでは、結局彼らの知識の一部しか分からない。彼らの知の領域は当然複数の典籍に及んでおり、それらを有機的なつながりとして見ていくことで、その知的基盤に少しでも近づくことができる。それによって、中世後期の文化がどのような知的営為によって支えられていたのかを解明することにつながることを期待される。この点が、本研究の学術的創造性である。

3. 研究の方法

本研究は、寛永整版本『古文真宝前集抄』をハブとする、学説のネットワークを明らかにすることを目的とする。そのための基礎的作業として、各抄文がどのような抄物の参照によって成立したかを、まずは明らかにしなくてはならない。言わば『古文真宝前集抄』を解剖し、出典ごとに仕分けすることが必要なのである。その上で、仕分けされた出典を総合し、本抄がどのような学説のネットワークの上に成立したかを明らかにする。

4. 研究成果

本研究課題における主な研究成果を以下にまとめる。

1 黄山谷(黄庭堅)の詩集の抄物『黄氏口義』(建仁寺兩足院蔵、二一卷・二二冊、林宗二筆、1560-1567年写)を主たる対象とする研究会において、「送王郎」詩の注釈の輪読を担当した(2020年5月23日・6月13日・7月11日・8月8日・9月5日・10月3日、浅見洋二氏(大阪大学大学院文学研究科)との共同発表)。

本研究課題の成果としての位置づけについて言えば、『黄氏口義』の抄文を精読してそこどのような先行学説が含まれるかを注釈的に検討したものであり、本研究において基礎をなす部分の調査研究と位置づけられる。

具体的な成果として特筆すべきは、本抄や三体詩の抄物である『三体詩幻雲抄』において、「岩栖」と表示して引用される学説があるのであるが、これが東福寺岩栖庵に住した希世靈彦を表すものであることを明らかにした(従来は別の禅僧であると考えられていた)。また本抄で言及される「漢書の点」というのが、大江家の訓法に一致するものであり、本抄の抄者がそのような学問的な圏域につながることも明らかにした。

2 「抄物研究から:翻訳・注釈としての訓点資料と抄物」『訓点語と訓点資料』146輯、2021年3月刊行

本論文は、訓点資料の研究者に向けて抄物研究の立場から行った提言であり、訓点資料を抄物資料と同様に翻訳・注釈資料として研究すること、およびその際の問題点と解決方法を提言した。本研究課題の成果としての位置づけについて言えば、抄文の内容の重層性や先行する資料からの継承性についてなど、本研究課題の基本的立場を公に共有しようとしたものと位置づけることができる。

3 「寛永19年版『古文真宝前集抄』の黄山谷詩の注について:万里集九『帳中香』とのかかわりから」(『日本語・日本文化研究』第31号、pp.6-21、2021年12月)

この研究では、『古文真宝前集抄』の黄山谷詩の注が、万里集九『帳中香』に基づきつつ、そこから『古文真宝』の林以正注・『山谷詩集注』の任淵注などを参考に、大幅に増補されていることを指摘した。また抄物同士の学説間のつながりを明らかにした研究であり、本研究課題の中心となる研究と位置づけられる。

『古文真宝前集抄』における黄山谷の詩の抄は、研究開始時点では一韓智翹の抄に基づく部分が大いと考えていたが、調査を進める中で、少なくとも漢文抄の部分に関しては、むしろ万里集九との関わりが大いことが明らかになってきた。これは当初予期していないことであったが、その結果、一韓智翹と万里集九との学問的関わりが見えてくることにもなった。加えて、笑雲清三の手になる『古文真宝後集抄』があることを考えると、(『古文真宝前集抄』の抄者は不明であるものの、)万里・一韓・笑雲というこの三名のネットワークが見えてくるのである。笑雲はある時期万里のもとで学んでいたことがあり、また一韓とは同じ詩社であった。さらに一韓と万里は詩のやりとりをするような関係であった。そういう個人的な関係が、抄物という著作における学説の関係にも影響しているのではないかと、という見通しを得ることができた。

これに関して次に問題となるのは、一韓智翹抄の信頼性である。従来この抄物は確かに一韓の抄であるとされてきたが、その根拠は、彼の死後(1500年以前か)150年ほど経ってから出版された整版本の末尾に「黄山谷詩集注一韓和尚鈔卷第廿終」と記されているだけなのである。本抄が果たして真に一韓の抄なのか、その点を確定させておく必要がある。研究の推進方向としては迂遠に思われるかもしれないが、基礎研究として、確実な証拠を着実に積み上げることが、文献学の取るべき方策であると考えられる。

この点についての研究成果はまだ公にできる段階ではないが、現段階で分かっていることを三点報告しておく。いずれも、これまでの研究では言及されていない、本研究代表者の発見したことからである。

- ・何人かの禅僧の説が、誰の説であるかを明示して引用されている。ここからこの「一韓抄」の学問的系統を推測することができる。
- ・「再講云」として引用される学説が何力所かに認められる。従って本抄は全体が何らかの講義の聞き書きに基づくと考えられる。
- ・それぞれ一個所ずつではあるが、「竹講云」「韓私云」として引用される学説がある。「竹」は桃源瑞仙が「竹庵」という号を使っていたことがあるらしいことと関連があるか。「韓私云」は、一韓の抄である可能性が高まるようにも思うが、道号下字をこのように自称に用いることがあるかどうか。一字で自称する場合にはむしろ法諱下字を用いることが多く、それであれば文英清韓との関わりを考えたい。しかし文英は永禄 11 (1568) 年の生まれである。一韓抄とされる抄の抄文は永禄十年に書写された林宗二『黄氏口義』に大量に引かれるので、これが文英の作ではありえない。

この問題についてはまだ研究途上であるが、なるべく早い時期に何らかの結論を報告したい。

4 「筆端鼓舞」という評価:抄物を通して見た文藝批評序説」(『日本語・日本文化』第 49 号、pp.1-18、2022 年 3 月)

この研究では、林希逸の『莊子』注釈に見られる「筆端鼓舞」という語が、五山文藝の世界において、文脈的に予想されるのとは異なる表現を言い、それを積極的に評価する語として使用されていることを指摘した。この語に関する研究としては小西甚一の論がある。小西は中世から近世の文藝史、特に俳諧の世界に、莊子の「寓言」説がどのように影響しているかを論じたものであるが、本論文はその影響を五山の文藝まで広げて考えたものと位置づけられる。これもまた『莊子』注釈という学問的な世界から、他の作品にその知識が敷衍されていくというつながりを明らかにした研究であり、本研究課題の中心的な部分に位置づけられる。

5 「解釈文法的立場から見た抄物の接続詞 アレドモとサレドモの用法上の類似をめぐって」(『国語国文』第 91 巻第 12 号、2022 年 12 月)

本論文は、抄物に特徴的な接続詞アレドモが、他の資料にも見えるサレドモと比較して、その他の接続詞とは異なる特徴的な用法を両接続詞のみが持つことを指摘し、そこから両者が文体的に使い分けられているとする従来の説を補強しようとしたものである。特に注釈対象となる原典と注釈文を比較して言語学の問題を解決しようとした点、本研究課題で得られた知見を言語的研究に応用したならばどのような成果が得られるか、実践したものと位置づけられる。

6 黄山谷(黄庭堅)の詩集の抄物『黄氏口義』(建仁寺両足院蔵、二一巻・二二冊、林宗二筆、1560-1567 年写)を主たる対象とする研究会において、序巻の詩の注釈を担当した(2020 年 11 月 12 日・12 月 17 日・2023 年 1 月 21 日・2 月 18 日・3 月 11 日)。

この序巻では、中岩円月・竜山徳見など他の巻には見えない禅僧の学説や所持本についての記述が豊富に引用されているほか、諸本を比較すると、他抄に存在しない独自本文が大量に含まれている。またわずかではあるが、一韓抄系統・山谷幻雲抄系統の二系統で共通する抄文があることも、他の巻には見られない傾向である。さらに、『毛詩』を引用した部分につけられた訓点や、清原家所用のものに一致するなど、学説の流れという点で注目すべき点が多い。これらのことはいずれも、当時の学問のネットワークを考える上で格好の資料となる。

いずれの研究成果も、抄物を中心とした、あるいは抄物を媒介として当時の文化的世界における「知」のつながりを明らかにしたという点に意義を主張したい。加えて、中世後期の文化を知る上で抄物資料を活用する有効性を示した点が、現在のこの分野における研究状況に照らして、重要であると考えられる。

研究期間全体を通じて、抄物を文化的資料として利用するという方法論の、理論的背景とその実際の方法のいずれについても、より精密な解像度で論じることができ、また得られた知見を公表することができた。また最大の目的であった抄物をめぐる学問のネットワークについても、古文真宝の抄物を具体的事例として、学僧たちの個人的な関係が、抄物という著作における学説の関係にも影響しているのではないかと、という見通しを得ることができた。

今回の研究期間では、『古文真宝前集抄』の中でも黄山谷に限定して調査した。しかし同様のアプローチは、黄山谷と並んで中世流行した詩人である蘇東坡や、その他の詩人の詩に対しても可能である。そして『古文真宝前集抄』に流入しているそれら複数の詩人の注釈を比較することによって、抄者の読書の系統にも接近することができる。今の例で言えば、山谷を一韓抄で学んだ抄者は、東坡の注釈は何に依っていたのか、ということまでをも探りうるのである。本研究課題の成果を踏まえて、文化史資料として抄物を活用することがいっそう活性化することがのぞまれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 蔦 清行、Tsuta Kiyoyuki、ツタ キヨユキ	4. 巻 49
2. 論文標題 「筆端鼓舞」という評価：抄物を通して見た文藝批評序説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語・日本文化	6. 最初と最後の頁 1～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/87448	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 蔦清行、Tsuta Kiyoyuki、ツタ キヨユキ	4. 巻 31
2. 論文標題 寛永19年版『古文真宝前集抄』の黄山谷詩の注について：万里集九『帳中香』とのかかわりから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語・日本文化研究	6. 最初と最後の頁 6～21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 蔦清行	4. 巻 146
2. 論文標題 抄物研究から 抄物研究から：翻訳・注釈としての訓点資料と抄物	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『訓点語と訓点資料』146輯、2021年3月刊行	6. 最初と最後の頁 110 - 117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 蔦 清行、Tsuta Kiyoyuki、ツタ キヨユキ	4. 巻 91-12
2. 論文標題 解釈文法的立場から見た抄物の接続詞：アレドモとサレドモの用法上の類似をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------